

第1回宮城県特別支援教育将来構想審議会 審議委員の御意見

カテゴリー	審議委員の御意見等
情報の共有	<ul style="list-style-type: none"> ● 特別支援教育に関する情報が少ない（小・中学校の特別支援学級数、特別支援学校児童生徒数等）。 ● 中学校長会で特別支援教育が話題になることはなく、関心が低いのではないか。 ● 中学校から高等学校への接続が課題である。 ● 高等学校としては、中学校との情報共有が大切（入学してから障害が見つかる生徒あり）である。 ● 幼稚園・保育所、小・中学校、高等学校それぞれの接続期においては、障害のある児童生徒は大きな不安や困難がある。 ● 居住地校学習や特別支援学校のセンター的機能について、通常の学校側からの評価が知りたい。
新構想の策定	<ul style="list-style-type: none"> ● 新たな構想には幼児児童生徒や保護者のニーズを取り入れることが大切である。 ● 新たな構想の策定のため、特別支援学校の意義・意味を再確認する必要がある。 ● 新たな構想には宮城らしさを盛り込んで欲しい。
教員の専門性	<ul style="list-style-type: none"> ● 教員の資質向上を図り、子どもたちへの多様な対応が大切である。 ● 視覚支援学校は県内唯一の学校であるため、教員の専門性の維持・充実が課題である。 ● 特別支援学校では教員の専門性を担保することが重要である。 ● 高等学校においても教員はADHDやアスペルガー等を理解するようになってきている。 ● 地域におけるセンター的機能の更なる充実が必要である。 ● 通常の学級に在籍する支援が必要な児童生徒への対応が必要である。 ● 教員（小・中学校）の資質向上が必要である。 ● 様々な子どもを抱えている通常の学級の教員は学級運営に困っている。

<p>地域支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校卒業後は、保健や福祉の観点から地域で支えている。 ● 学校は学ぶ場であるとともに、福祉に繋がる場。地域で共に暮らすのが一番である。 ● 支援員がいなくても子どもたちが生きていけるような対応が重要である。 ● 自分たちの暮らす街の素晴らしさを共有し、県土の均衡な発展が必要である。 ● 市町村では色々な方々とのネットワークの構築が大事である。 ● 特別支援学校では教員の専門性の向上を図るなど、センター的機能をさらに発揮するべきである。 ● スクールクラスターが大切である。 ● 障害がある子どもを早期に発見し就学に繋げようとしているが、保護者の気持ちから難しい。 ● 発達障害の早期発見と言われているが、適切な時期に診断することが大切である。 ● 預かり保育や、放課後ケアにも支援員が必要である。 ● 学校から特別支援教育支援員の増加の要望がある。 ● 市町村教育委員会へ特別支援教育担当者の配置が必要である。
<p>校内体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● コーディネーターを中心とした校内委員会を組織し対応している。 ● 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の妥当性や、移行ファイル等卒業後の対応を検討したい。 ● 現在、高等学校では特別な支援が最大の課題である。 ● 豊富な知識と技術を備えている退職教員のマンパワーを現場で活用する政策があるとよい。
<p>進路指導</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就職はゴールではなく、スタートである。就職してからが大変である。 ● 特別な支援が必要な生徒の就職や自立のため、特別支援学校での対応事例等の参考情報が欲しい。 ● 市町村教育委員会では高等部卒業後の生徒の様子が全く分からない。
<p>県行政</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 特別支援学級の定数変更（8→6）を国へ要望している。 ● 国へ設置基準の策定を働きかける必要がある。 ● これまでソフト面の充実は図られてきた。今後は、ハード面の充実が必要である。